

1.

けいとう

花き類《ヒユ科》原産地：インド

熱帯、亜熱帯原産で、寒さには弱いが高温には強い。
夏～秋にかけての花壇には欠かせない。草丈、花の色や形など
多くの種類がある。

栽培カレンダー

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
トンネル栽培			●	×	★	★	★	★				
露地栽培					●	×	★	★	★			

● 播種 トンネル × 定植 ★ 摘心 収穫

栽培のポイント

- 種まき時に地温が低いと発芽しにくいので、予めトンネル掛けして地温を上げておく。
- 切り花用には摘心して、側枝を出させ草姿を良くする。
- 生育後半は、肥料が切れるようにする。

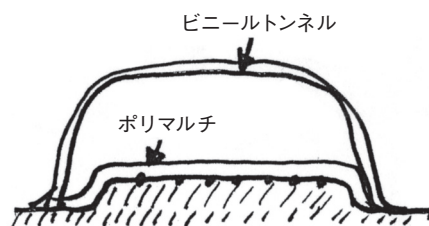
品種・系統

- きもの系：は種後、約50日に草丈10cmで出穂し、花穂は草丈の半分ほどに大きくなる。
- キャッスル系：草丈20～25cmで側枝が旺盛に出て、草姿のまとまりが良い。
- わい性トサカケイトウ：花壇や鉢植えに適する。
- 久留米系やコロナ系：草丈が高く切り花用に適する。
- 他に、ヤリケイトウ、玉ケイトウ、羽毛ケイトウなど種類が豊富。

作り方

は 種

- は種床は排水の良い、平床(床幅1m)を作り、種子を均一にばらまきするか、5cm間隔に条まきする。(種子量は1アールあたり0.3dℓ)
- 発芽適温が高く、地温に左右されるため、3～4月まきは最低15℃以上保つように、ビニールで二重トンネルを作り、蒸し気味にすると発芽が早い。
- 発芽し始めたら二重トンネルを取り、日中は換気とともに、日光を良く当てる。本葉5～6枚までに間引きして、しっかりした苗を作る。
- 定植2～3日前からかん水を十分に行い、できるだけ根土を付けるようにする。



定 植

- 本葉が5～6枚になった時に、うね幅1mの2条植え、株間15cmで定植する。けいとはは、直根性で本来移植を嫌うので、できるだけいねいに作業を行う。

施 肥

- 生育初期に肥料が多いと茎が太くなり過ぎるので、元肥を控え追肥を主にする。一般的には、元肥に完熟堆肥を1アールあたり100kg施して無肥料栽培とする。
- やせ地では、普通化成肥料の苦土入り化成肥料8-8-8を1アールあたり5kg施用してから土寄せをする。収穫時に下葉が少し黄ばんで色が抜けるぐらいが理想的。
- カリ分の多い肥料を施用すると、花冠が発達しやすい。また、追肥には生育状況を見て薄い液肥(液肥2号の500倍液)をかん水代わりにやる。
- 施肥例 (1アールあたり)

元 肥

◎堆 肥:100kg

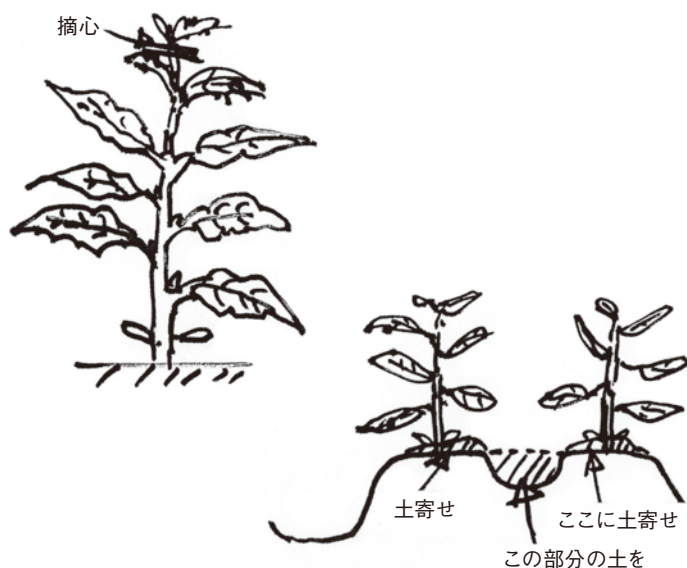
◎苦土入り化成肥料8-8-8:5kg

追 肥

液肥2号:500倍液

その他の管理

- 定植10日後頃に、摘心し、側枝を出させる。
- 摘心直後に、条間を軽く耕し、除草とともに土を柔らかくする。また倒伏防止のため土寄せを行う。
- 生育に合わせて2回目の土寄せとともに、早めに支柱を立てネットを張っておくと良い。
- 土が排水不良で過湿になると、生育ムラや立枯れが出やすいので、排水に注意する。



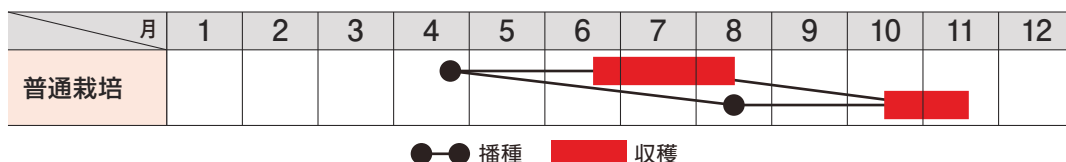
2.

コスモス

花き類《キク科》原産地：メキシコ

外来品種だが、日本の風景にとけ込んでいる。
台風などで倒れても、茎の途中から根を出し、また立ち上がって
花を着けるほど強い。

栽培カレンダー



栽培のポイント

- 栽培期間が短く、種まき後60日前後で収穫できる。
- 肥料が多いと草丈が伸びすぎ、茎も太くなりやすく、切り花後の水揚げが悪くなる。
- 本葉6〜7枚頃に摘心すれば、わき芽が出て草姿が良くなる。

品種・系統

- ベルサイユ：桃色地に紅の蛇の目咲。側枝の発生が少なく、花梗が太く切り花向き。
 - センセーション系統：花径12〜20cmの大輪系の早生種。特に水揚げが良く切り花用に最適。
 - ソナタ混合：花径7cmの一重咲。草丈50〜60cmの矮性種。花色は赤紫、桃、白色など混合。
 - キバナコスモス系統：多花性だが草丈が短く花壇苗用の矮性品種。
- ※ 早生系の品種以外は、日長が短くなる秋まで開花しない場合があるので注意が必要。

作り方

は 種

- ハウス促成栽培以外は、直播きが一般的。うね幅120cmで、条間20cm、4条に1〜2粒点まきし、覆土は種子が隠れる程度で発芽するまで乾かないようにする。
- 本葉1〜2枚の時に5〜6cm間隔に間引きする。
- 施肥：肥料分が多いと軟弱徒長気味となって開花が遅れる。そのため、やせ地でも1アールあたり、苦土入り化成肥料8-8-8を3kg、元肥に施用する。
- その他管理：草丈が伸びると風雨で倒れやすくなるため、1〜2回株元に土寄せをする。また、15〜18cm間隔のフラワーネットを1段張っても良い。

たのしい
農産物づくり



農業者向けLINEにて
防除等の情報を配信しています!!

病虫害防除は、発生前や発病初期の対応が大切です。組合員のみなさまが作られる作物を守るため、タイムリーな情報をお届けしますので、是非、お友だち登録をお願いいたします!

LINEの
お友だち登録は
こちら!



JA OSAKA-HOKUBU



3.

つつじ

花き類《ツツジ科》原産地：日本ほか北半球温帯

4～5月の代表的な落葉低木。

サツキもシャクナゲもツツジ科の仲間。ツツジはサツキに先立って咲き出す。公園や街路、庭など需要が多い。

栽培カレンダー

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
挿し木・育苗 (1年目)			▼	▼		▼			▼			
定植・養成 (2年目)			×		×							
養成(3年目)												
養成・出荷 (4年目)												
出荷(5年目)												

▼ 挿し木 × 定植 出荷

栽培のポイント

- 系統・品種が多いため、販路などを決めて、その需要に適したものを選ぶ。
- 根は、細根が多く土中でも浅く横に張るため、排水の良い所で浅く植える。

種 類

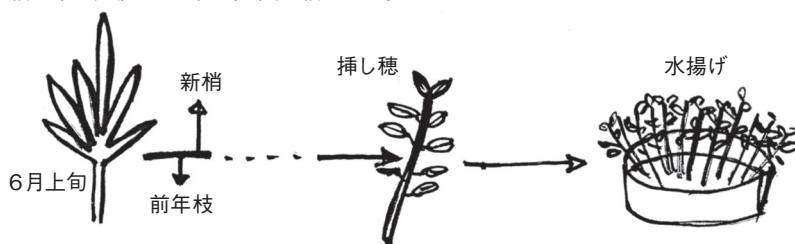
- 久留米ツツジ、キリシマツツジ、ヤマツツジなど日本には約50種が自生し、古くから栽培されている。そして、それぞれ改良されて園芸品種が数百品種もある。

作 り 方

育 苗

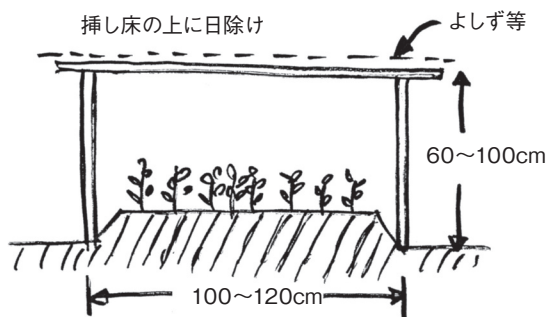
- 1アールあたりの親株は、10～15株が必要。
- 挿し木の適期は、3月下旬～4月上旬(前年枝を利用)、6月上中旬と9月(今年枝を利用)の3回あるが、春挿しの方が生長が1年早くなる。
- 挿し穂は、太く充実した新梢を約10cmに切って、下葉を1/3程度取り除いた後、穂木がしおれないように1～2時間水揚げをしておく。

枝や葉に光沢があり元気の良い枝を選ぶ。



- 床土は、弱酸性で保水力があり、無病で清潔な用土(真砂土、鹿沼土)を選ぶ。

- 床幅100～120cmのうねを立て、挿し木の間隔は3×3cm(3,000本／坪)で、穂の長さの1/3程度を挿し込む。
- 挿し床は風当たりが少なく、冬暖かで、夏涼しい所を選ぶ。萎れを防ぐため60～100cmの高さで、よしずや黒寒冷紗で日除けをする。
- 挿し木後にかん水し、以降、夏には毎日1回、春と秋は2～3日おきに1回の割合でかん水する。
- 挿し木後60日位で発根するので、9月に菜種油粕を少し施用し、11月に簡易な防寒をして苗を保護する。

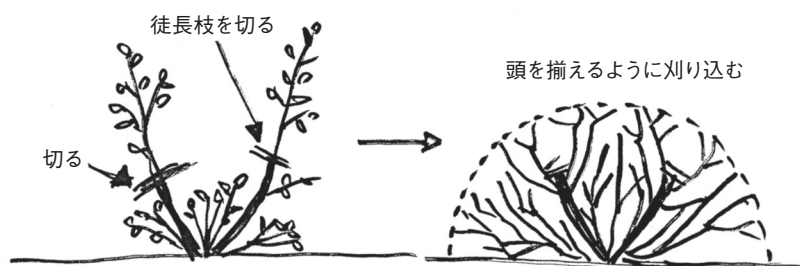


本 田

- 定植準備：定植の半月前に元肥を全面施用し、耕うん後、幅120cmのうねを立てる。
- 定植：3月下旬～5月上旬に、株間20cmの3条植えとする。植え付け後は、敷きわらをして乾燥を防ぐとともに、活着するまで十分かん水をする。
- 施肥例（1アールあたり）

施肥 時期	1年目		2年目以降
	元肥(3～4月)	5～8月に毎月分施	4～8月に毎月分施
肥料の種類 と量	完熟堆肥 200kg	苦土入り化成肥料8-8-8を毎月5kgずつ施用。	
	過リン酸石灰 10kg		
	菜種油粕 8kg		

- その他の管理：定植2年目の6～7月と、3年目の3月に1回刈り込みをする。後は、生育に応じて1回、徒長枝などを間引きせん定する。



- 出荷：定植後2～3年で30×30cmの規格品となったものを掘り取り、根土をつけずに出荷する。(9月中旬～5月下旬)

4.

夏ぎく(小ぎく)

花き類《キク科》原産地：中国北部で改良

菊は古くから秋の花として親しまれてきた。
今では品種改良や栽培技術の開発で年中出回るようになった。
仏花用としても安定需要。

栽培カレンダー

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
7月咲き											×	
8月咲き				×	★							
9月咲き					×	★						

× 定植 ★ 摘心 トンネル 収穫

栽培のポイント

- 春に定植するきくは、品種の開花時期によって定植時期を合わせる。
- 品種によっては定植時期が遅れると蕾ができない(ブラインドという)品種もある。
- 定植が早すぎると草丈が長くなり、柳芽が発生して形が悪くなる。

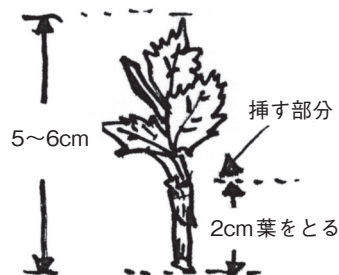
品種・系統

- 7月咲き：しおり、いずみ、夏の月、七夕こまち、等
- 8月咲き：こばと、はずき、メロディ、花秀美、等
- 9月咲き：あずさ、一休、いこい、えびす、等

作り方

育苗

- 親株は、収穫直後に地際から刈り取り、株を整理する。病気の出ている株は捨て、健全な株だけを残す(1アールあたり、約100株の親株が必要)。
- 挿し芽予定の約2ヶ月前に新芽を摘心して、挿し穂を確保する。
- 挿し床は排水、保水の良いパーライトを使う。日当たりが良く保温しやすいハウス内でない、発根まで長時間かかり草丈が短くなる。



- 挿し穂は展開葉2~3枚をつけ、5~6cmの長さに調整後、葉がふれあう程度の間隔に挿し芽をする。挿し芽後、日除けをし、発根とともに徐々に取り、日光に馴らして丈夫な苗をつくる。

定 植

- きくは根が浅く過湿に弱いので、排水が良く有機質に富む土が良い。そこで、植え付け2週間前までに、堆肥と苦土石灰を施用して耕しておく。
- 定植予定の2～3日前に、挿し床に十分かん水しておく。
- うね幅 120cm、条間 30cm×株間 10cm の2条植え。挿し芽後2週間で、根が1～2cm伸びた苗を植える。定植後は十分かん水し、敷きわらで乾燥や雑草防止をする。

施 肥

- 施肥例 (1アールあたり)

元 肥 (定植2週間前までに施用)

追 肥 (7月中下旬までに2回)

◎堆 肥 : 200kg

◎大阪北部エコ有機3号 : 4kg×2回

◎苦土石灰 : 15kg

◎菜種油粕 : 10kg

◎大阪北部エコ有機3号 : 10kg

その他の管理

- 7月咲きは、草丈を確保するため摘心しないで栽培する。
- 8月咲きや9月咲きは、頂芽が伸び、活着が確認されたら、展開葉4～5枚の所で摘心し、4～6本のわき芽を出させる。(定植7～10日頃)
- 摘心後、すぐに除草を兼ねて土寄せをする。(第1回目の追肥と同時に行う。)この作業で、株の草勢が旺盛になる。
- 草丈が15～20cmの頃、2回目の土寄せを行い、発根を促し、生育後半の下葉の枯れ上がりを防止する。
- 草丈30cmの頃に、フラワーネットや針金を張り、倒伏を防止する。
- 乾燥するときには、うね間かん水をし、梅雨期にはうね間を深く掘って排水を良くする。乾燥防止と保水や地温上昇防止を目的に条間に敷きわらをする。

5.

葉ぼたん 花き類《アブラナ科》原産地：ヨーロッパ南部

明治時代になってから、
正月用の飾りとして需要が高まり、広く栽培されるようになった。
花壇や鉢植え、切り花など利用方法も広い。

栽培カレンダー

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普通栽培							●●	●●	×			

●● 播種 × 定植 収穫

栽培のポイント

- 気温 25℃ 以上になると生育が抑えられる。

品 種

- F₁ 丸葉系
は と(紅、白)：小型で耐寒性に優れ、葉数が抜群に多い。
つぐみ(紅、白)：小型わい性で、葉数が多い。
- F₁ ちりめん系
すずめ(紅、白)：小型わい性で、葉数が多く、耐寒性も強い。
かもめ(紅、白)：小型のわい性品種
- F₁ 切れ葉系
くじゃく(紅、白)：葉が深く切れ込んだ形状で、耐寒性が強い。

作 り 方

は 種

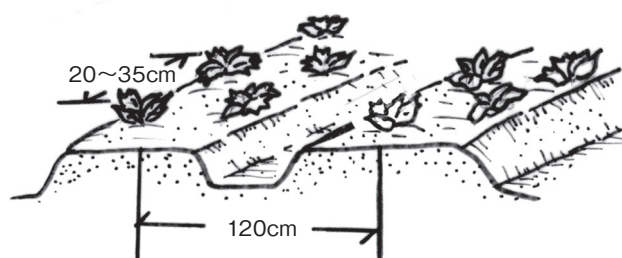
- F₁ 種は、7月末～8月上旬に種まきをする。遅れると、十分な葉数が確保できない。
- は種 1週間前に、1アールあたり苦土入り化成肥料 8-8-8 1kg を施用し、耕しておく。
- は種床の面積は、定植畑の 1/15 を準備する。幅 1m の平床に、5cm 間隔に浅く溝をつけ、約 1cm 間隔に種をまき、種子がかくれる程度に軽く細かい砂で覆土する。
- 切りわらなどで覆ってから十分かん水する。
- トロ箱やセルトレイ(200穴)に、種をまいても良い。
- 種まき後は、黒寒冷紗などで日覆いをする。発芽が揃えば徒長させないために、寒冷紗をとる。
- かん水は朝に行い、夕方は土が少し乾く程度にする。
- 本葉が出始めた頃に、葉が重なり合わないよう間引きする。

移 植

- 本葉2～3枚の頃に、仮植の平床(は種床の5倍の面積)に10×10cm間隔に仮植し、十分かん水する。葉色の緑色が薄くなれば、液肥2号を500倍で散布する。

本 田

- 定 植：定植の20日前までに堆肥や苦土石灰を施用し耕しておく。うね幅120cmで、元肥は定植の1週間前にうねに施用して軽く耕しておく。定植は、株間20～35cmの2条千鳥植えて、適期は9月上中旬で本葉6～8枚の苗。



株間は大株か小株仕立てかで調整する

●施 肥 例 (1アールあたり)

元 肥

- ◎堆 肥 : 200kg
- ◎苦土石灰 : 15kg
- ◎化成肥料14-10-13: 10kg

追 肥

- ◎1回目：定植10日後 苦土入り化成肥料8-8-8: 15kg
- ◎2回目：定植20日後 化成肥料14-10-13 : 10kg

- 生育初期～中期に肥料切れになると、葉数が少なく商品価値が下がる。
- 生育後期までチッソ肥料が残ると色ぼけするため、10月中旬以降は追肥しない。
- 発色後、外側の葉が黄色くなりだしたら、液肥2号の500倍液を散布する。

- 霜 よ け：霜が降り始めたら、不織布(パスライト等)の浮きがけで霜よけをする。(ちりめん系の白色品種が、特に霜害に弱く葉が傷みやすいので注意。)

6.

ひまわり

花き類《キク科》原産地：北アメリカ中央部(カリフォルニア州ほか)

南米ペルーの国花で、太陽の花といわれる。
草丈の高い品種から花壇用のわい性品種や一本立ちタイプや
分枝タイプ、また花色も豊富。

栽培カレンダー

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普通栽培				●	●	■	■	■	●	■	■	

●● 播種 ■ 収穫

栽培のポイント

- 吸肥力が強いので、肥料を与えすぎないこと。
- 大きな花を咲かせるためには、蕾を2～3残し、その他は摘み取る。
- できるだけ日当たりの良い場所に植えると、花つきが良くなる。

品種・系統

- サンリッチ系統：日長に関係なく、種まき後約2ヶ月で開花する。温度さえあれば冬でも花を咲かせる極早生品種で、切花が周年出荷される。
- 太陽：草丈150cm。花径12～20cm。特に水揚げが良く切り花用に最適。
- かがやき：花粉が出ないため、長期間黒褐色の花芯を楽しめる切り花用品種。
- ミニひまわり：草丈は鉢植え20cm、花壇60cm。
- ハイブリッドサンフラワー：花は小ぶりで、観光ひまわり園でよく見られる採油種。

作り方

は 種

- 発芽適温が高いので、十分に気温が上がってから、は種する。40～50cm間隔に2～3粒ずつまいて、発芽後に生育の良いものを1本残し、その他は間引く。

施 肥

- 元肥は、特に土地がやせていない限り施さない。吸肥力が強いので与えすぎに注意。下葉が黄色く肥料切れと思われる場合は、化成肥料14-10-13を少量追肥する。

その他の管理

- 草丈を70～80cmに抑えるためには、密植、節水、少肥で栽培する。4～5月に種をまく場合は、背が高くなるので本葉3～4節で摘心する。